

『点と線』と『時間の習俗』の間

——松本清張私論①——

加 納 重 文

松本清張が流行作家としての地位を確立した時期は、昭和32年の2月から翌年1月までの1年間、雑誌「旅」に連載した『点と線』、33年3月から翌年の1月にかけて雑誌「宝石」に連載した『ゼロの焦点』が、江湖に普く迎えられたあたりではないかと思われる。昭和26年、週刊朝日の懸賞小説に応募した『西郷札』が佳作として入選、それを契機として作家としての歩みを始めた清張は、特に昭和28年以降、顕著に精力的な活動を見せているが、それは、必ずしも推理小説作家としての活動ではなかった。彼の本格的推理小説の開始は、昭和32年の『点と線』を嚆矢とし、以後、社会派推理小説と呼ばれる新たな価値観を持つ作品が、次々と発表されることとなった。その『点と線』および、姉妹編と言ってよい『時間の習俗』、この両作品についての私見を述べてみたい。

—

『点と線』は、情死を扱った作品である。いや、情死に見せかけた殺人を扱った作品である。官公庁の収賄・汚職事件が追求される時、往々に、たまたま核心的な場所に位置した官僚—それは、おおむね課長補佐と呼ばれる程度の中級実務者

であった―が、司直の追求に耐えかねて命を絶つケースが、稀でなかった。大方は、実直な中級官僚の犠牲的な自死行為であったけれど、これが、殺人としてなされた時には、どうなるか。当然、殺人事件として厳しい捜査が行われ、その後関係が糾弾されていくであろう。それが情死となれば、事件としての捜査もなされず、社会的な問題になっている汚職事件の追及も、偶然の情死事件のために、曖昧模糊の状態となって雲散霧消してしまう。それを狙った殺人事件の顛末として、この作品は語られる。

小説は、昭和三十二年一月二十一日の早朝、博多湾に臨む香椎海岸で、男女二人の遺体が発見されることから始まる。二つの死体の間は隙間も無く接して、共に着衣の乱れも無く、付近にオレンジ・ジュースの瓶が転がっていた。二人とも死者と思えない血色をして、これが青酸カリによる服毒死であることが、明瞭であった。現場に到着した福岡署の刑事・警察医・鑑識係などは、一目見て「心中事件」と即断した。誰が見ても、自然な推測であった。しかしこれが、情死を装った殺人事件であることが、福岡と東京の二人の刑事によって、解明されていく。この小説の大筋は、このようなものである。

二

香椎海岸で発見された遺体の一人は、ポケットから出てきた名刺入れから、××省××課の課長補佐「佐山憲一」とすぐ知れた。今一人の女性の方は、これも財布の中の名刺から、赤坂の割烹料理屋小雪の女中「とき」であることが、すぐに判明した。この情死事件に不審な点があるとすれば、佐山憲一が、現在汚職事件の摘発が進行中の官庁に所属する、しかも中枢に近い立場の官僚であり、彼の消滅によって、汚職事件の解明に確実に打撃となる事態であることである。このタイミングの良い情死が、本当に情死であるかどうかの疑いは、誰しも抱く。

本当に情死であるとするなら、二人が情死するにふさわしい濃密な関係であったという前提が確認されなければならぬ。その確認として知られた操作が、東京駅における「四分間の空白」である。後に、この殺人事件の実行者であることが分かる、機械工具商安田商会の経営者・安田辰郎が、割烹料理「小雪」の女中二人とともに、東京駅13番ホーム（横須賀線）から、15番線の博多行特急あさかぜに、佐山とお時の愛情関係は、警察の調べでも、全く確認されなかった。それが、東京駅の人混みの中でのただ一回の目撃で立証されたということになるのであるが、13番ホームから15番ホームを望見できる時間は、17時57分から18時01分までの四分間だけであり、その時間に間に合うことを頻りに気にしていたという安田の態度から、警視庁捜査二課の三原警部補は、これを「作為」と感じる。

この小説の展開のために、三原警部補が感じた「作為」の認識は、多少鋭敏に過ぎる感もあるが、必要なことでもある。だから、それに異をとねえることはしないが、この小説のトリックとして著名な四分間の空白の設定そのものには、疑問を感じる側面もあり、述べておきたい。

東京駅における、13番ホームから15番ホームが見渡される四分間の設定は、この小説を話題作とした要素であるけれど、作品のリアリティーの問題として言えば、疑問の余地があると思う^①。というのは、この偶然が、佐山とお時の情死を納得させる、唯一の有効な要素であるにもかかわらず、虚構の要素が勝ち過ぎているとを感じるからである。第一に、鎌倉に帰る安田を、東京駅のホームまで見送りにと依頼するのが、通常の間感でない。次に、空白の四分間の間に、女中二人を13番ホームに立たせたとしても、佐山とお時が、その四分間の間に15番ホームに上がってくるという保証も何もない。博多行の特急「あさかぜ」は、17時49分から18時30分の間、15番ホームに停車していた。佐山とお時の二人が、問題の四分間の間に乗車するという約束などはない。さらに、乗車するとしても、どの階段から上ってきて、人混みの中をどのよ

うに進んで乗るか、安田の目に触れながら乗るといふ保証もない⁽²⁾。

要するに、この偶然は、安田によって「作為」的に仕組まれたものであるが、偶然が、現実の出来事となる可能性は、かなり少ないことであつた。にもかかわらず、事実として実現した。この小説の骨子ともなる設定として構想されていたからである⁽³⁾。この偶然は、この小説にとつて必須な偶然であつた。佐山とお時の情死を説明する、唯一の要素であるから、一〇〇パーセント実現しなければならぬ偶然であつた。後に、安田の北海道行の精緻なアリバイを突き崩していく過程が、この小説の骨子となるけれど、三原警部補が感嘆するほどに計算し尽くすことが可能な安田にしては、一〇〇パーセント現実になつて貰わなければならない設定として、あまりに、配慮が行き届かない演出となつていないだろうか。小説だから良いというものではない。小説のリアリティーを確保するものは、それぞれの部分のリアリティーである⁽⁴⁾。この小説を話題作たらしめた要素についての疑問は、やはり指摘しておかなければならないと考える。

三

香椎海岸で、男女二人の情死体が発見されて、男のポケットにあつた、列車食堂の受取証の「御一人様」の記述を見て、福岡署の鳥飼刑事は、思わず、

「御一人様？ この男は一人で食堂で飯を食べたのですかな」

と、感想を洩らした。洩らしただけでなく、これを気に留めて、娘に「婚約者が空腹で食事しようとしている時に、お前は付き合わないで待っているか」と聞いてみたりして、1月14日、佐山が東京駅で目撃された日の列車食堂での食事が、一人で済ませたものであることを推測した。警視庁から出向いた三原警部補は、鳥飼刑事のこの推測を聞いて、「おもしろい着眼ですね」と褒め、自分も同意見だとして、東京駅では二人で乗った特急車内で、佐山がその日のうちに一人の行動

になったことを推理した。同行していたお時は、23時21分に到着した名古屋以前の駅で、降車していたであろうという推理でもあった。

列車食堂の受取証などがポケットにあったというのは、受け取ったけれどすぐに捨てられなかったというだけで、わざわざ取っておいたなどというものではない。たまたまポケットにあったとしても、博多駅か旅館のクズ籠にポイと入れられるのが普通であろうが、それが五日後までポケットのうちにあつて、鳥飼刑事や三原警部補の推測の手がかりになる。ややギクシャクした流れに見えるが、まあ、それは容認するとして、それが、特急が名古屋に着く以前に、すでに一人になつていたという証拠に、どれほどなるだろうか。確かに、恋人が食事をしたいと言えば、付き合つてコーヒーでもというのは人情ではあるうが、体調が悪かったり、すでに眠かったり、なにかの事情があつて席に残っている場合も、少ない可能性ということでもないだろう。要するに、列車食堂の受取証から、すでに名古屋駅以前に佐山が一人であつたことを推測する設定が、必要な構想としてあつたからということであるが、すでに原則に外れた推理になつている。

それらの推理の経緯を不自然と感じるけれど、それとはまた別に、お時が熱海で下車し、安田の妻亮子の到着まで、旅宿で五日間を過ごすということの意味とは、どういふものであろうか。それが、分かりにくい。十四日の夕刻に東京駅で特急に乗車した佐山は、博多に着いて旅宿に入った。一緒に特急に乗車したように見せたお時は、熱海で下車して、お時はお時で、熱海で無聊な五日間を過ごしている。後に、亮子と合流して博多に向かつたことから推測して、安田の愛人お時は、佐山の殺人計画を知つていて、愛人安田のために、役割の一端を担つて行動していたのであろう。それなら、東京駅で同僚の女中二人に目撃されるといふ役割を果たした後に、完全なる情死計画が遂行されるために、そのまま博多まで同行し、「愛し合う恋人」にふさわしく見える演出がなされなければ、画竜点睛を欠く。情死直前の濃密な愛情が演出されるなら、それが望ましいが、本当の恋人でない佐山との交情は堪えられないという感情も分からなくはない。だがせめて、

旅宿の同じ部屋に寝起きして、現世の名残の時間を共にしている「ふう」を装うくらいはしてもいい。身の置き所も無い感情のままに放置されている佐山を、無事に「情死」の終着に至らしめるための、ひそかな監視役としても、お時は、佐山の周辺にあるべきであった。それでこそ、死地に向かう佐山を、送り出す役目をしっかりと果たしたであろう。

それなのに、熱海で下車し、なぜか、五日間の無意味な待機の時間を過ごす。その設定が必要であったとすれば、それは、最後の情死現場に連れ出す時に、二人が一緒にいる場面が支障になるということしか考えられない。この小説の末尾で、佐山とお時が発したあと、なぜ「六日間も間を置いて福岡に行ったか」について、安田が「すぐ東京を離れては疑われるという用心からです」と説明している。それは承認するとしても、その間、佐山とお時が別々にいることを求められる状況は、なにもない。むしろ、不自然で無意味な設定と言つてよいが、そのために、列車食堂の「御一人様」の受取証が、無理に構想されている。この一連の発想が、作者のどのような必要の認識によつて、小説に取り入れられたのか、私には、理解しかねるものがある。

四

ところで、長編推理小説としての『点と線』の根幹は、言うまでもなく、事件の実行者安田のアリバイ崩しにある。安田警部補の質問を受けて、安田が、一月二十一日前後の行動として答えた内容は、次のようなものであった。福岡の香椎海岸で情死事件があった頃、彼は、北海道出張の最中だった。安田が手帖を取り出して言つた内容は、「20日19時15分、上野発急行。21時9時9分、青森着。9時50分、青函連絡船乗船、14時20分、函館着。14時50分、根室行急行「まりも」函館発。20時34分、札幌着。札幌駅で、出迎への双葉商会の河西某に会い、その案内で、旅館丸惣に入り、宿泊。翌日の二十二日・二十三日も同旅館に泊まり、二十四日に北海道を発ち、二十五日に帰京」というものであった。まさに、北海道

と九州、接触しようのない距離で、これが判然とした事実なら、安田の犯罪の実行は不可能である。

もちろん、三原警部補は、安田のアリバイ崩しに奔走する。まず、安田が乗ったという、上野駅19時15分発の急行「十和田」に乘車して、青森着が翌朝9時9分。函館に14時20分に着き、50分に急行「まりも」発。寸分の狂いも無く、安田が答えた通りに、夜の札幌駅に着いた。双葉商会の営業主任の河西にも聞いたが、安田の言う通りであった。ただそこで、河西が洩らした小さな疑問。急ぎの商談と言って電報で呼ばれた割には、不急の用件であったということ、それと、出迎えたのが、ホームでなく待合室であったこと、この二点が、三原の疑念として残った。ここから三原は、安田の虚構を確信し、青函連絡船の乗船客名簿で確認することを思い付いた。やつとこのことで函館駅に着き、乗船客名簿を調べた結果、安田辰郎の名を目の前に見て、「三原は完全に敗北を悟った」と、小説は記している。乗船客の中には、汚職摘発渦中の石田部長の名もあつた。安田が香椎海岸での情死事件を演出して、ただちに北海道に向かったとして、どのように操作しても、凶行後の二十一日20時34分着の急行「まりも」で札幌に着くことは不可能である。ここで閃いたのが、福岡―東京―札幌という飛行機の活用であつた。結局、この発想と官僚組織の隠蔽工作の発見によつて、アリバイが崩れ、情死を装つた殺人事件の内実が明るみになることになる。

このアリバイ崩しの過程を見て、疑問を感じたところから述べる。三原は、列車ではどのようなにしても博多から北海道に着くのは不能、「翼でもないかぎり」と思わず呟いた時、途端に「あつ、と危く叫」んで、階段を二段滑るほど驚愕して、飛行機に気付いたことを、小説は記述している。しかし、これはおかしい。戦後十二年、旅客機営業も開始されて、小説でも確認しているように、

福岡 8:00 ↓ 東京 12:00 (302便)

東京 13:00 ↓ 札幌 16:00 (503便)

という経路があることは、自明である。これを、今、仰天させて気付かせるというのは、むしろ小説の作為が過ぎる。この小説は、日本交通公社発行の「旅」という雑誌の連載小説である。従って、清張のサービス精神であるが、終始、列車にこだわった構想と記述を意図している。その結果として、気付くなら最初に気付いてよいトリックに、後になってあらためて着想させるといった、見えすいた不自然な構想をさせている。これも、この小説の瑕瑾と評されるべき事柄かと思う。

五

しかし、最大の問題点は、情死現場そのものにあると思う。佐山課長補佐は、東京駅で目撃された特急で博多に着き、情死前夜まで、市内の丹波屋という旅宿に泊まっていた。鳥飼刑事の質問に、宿屋の主人は、「客は、毎日何もせず、陰気な顔でひたすら電話を待っていた」と答えた。情死前夜に女性の声で電話があり、佐山は慌てて出て行ったという。汚職事件の渦中にあつた課長補佐は、石田部長の指示を待っていたのであろうが、それにしても出入業者の内妻に呼び出されて、厳冬のしかも闇夜の海岸に、さほどの疑問も無く連れ出されるのは、説明を必要としない行動であろうか。鳥飼刑事の聞き込みによれば、二人は国鉄香椎駅前の果物屋の前を通り、「さっさと西鉄香椎駅の方へ」歩いて行ったという。同じく鳥飼刑事は、聞き込みの最中、若い男から、知らない男女の一組の情報を得た。通りすがりに、女の「ずいぶん寂しい所ね」という声が聞こえたという。

男に連れられている女が、「ずいぶん寂しい所ね」と口にしたことから推測すれば、この女は、佐山を香椎海岸に連れ出そうとしている亮子ではない。博多で再会して、安田に連れられているお時で、連れの男が安田である。それにしても、お時は、東京駅で佐山と一緒に特急に乗ったところで役目は果たした筈で、今、安田に連れられているのを何のためと考

えているのであろう。自分が情死の相手として、青酸カリを飲むために海岸に向かっていると思つてははずがない。熱海から、安田夫人の亮子と一緒に福岡入りしたお時だから、佐山が待ちうけている運命については、知らされているだろう。安田と一緒に向かっている海岸で、佐山の身に何が起きるか知った上で、安田と同行しているのである。しかし、それが情死という形で実現することとは全く思つていない訳であるから、わざわざ熱海からこの嚴冬の海岸にやってくるも、表向きは、彼女が果たすべき役目はなにもない。

安田はお時を殺すと、

「おおい、亮子」

と、大きな声で呼んだに違いありません。亮子は、

「はあい、ハンコよ」

と、闇の中で答えたでしょう。

と、小説は記述している。恋人たちに似合いの、夏の夜の海岸ではない。玄海灘の強風が吹きつける香椎海岸で、声も互いに見知っている知人同士が、互いの姿が闇の中に溶け込んでいるのを頼りにして、近接して位置を占めながら、しかも、互いの相手に青酸カリを飲ませるといふ役目をほぼ同時に果たすなどということが、可能性として無ではないけれど、きわめて不自然、きわめて低い確率でしか、実現しない事柄ではなからうか。しかも、どこかの時点で、僅かな支障が生じただけで、精密に準備した計画が軽く頓挫してしまう。頓挫はしない、小説だから・・・と言うのはおかしい。小説だからこそ、よりリアリティに支えられた設定がなされるべきである。「事実は小説よりも奇なり」という言葉があるが、事実であるからこそ「奇なり」と言える。「小説は奇なり」を自認しては、フィクションの中に描かれる真実性を、自ら稀薄としていくことにならないだろうか。

『点と線』から四年後、昭和36年5月から翌37年11月にかけて、清張は、同じ「旅」に、『時間の習俗』という小説を連載した。旧暦元旦未明に、関門海峡の九州側突端の和布刈岬で行われる神事の幻想的な描写から始まり、冒頭から清張作品らしい情趣を感じさせる小説である。この小説に登場するのが、『点と線』でも活躍した、警視庁捜査一課の警部補・三原紀一と、福岡警察署の刑事・鳥飼重太郎である。このことでも分かるように、『時間の習俗』は、前作『点と線』を意識し、その姉妹作のような形で成立した。同じ雑誌「旅」の連載小説ということで、清張のサービス精神を感じる作品である。内容も、前作と同じく、小倉・博多・水城と福岡辺を舞台とした推理小説であるが、殺人の現場は、神奈川県北端の相模湖で、福岡周辺は、アリの舞台として活用されている。

二月六日の夕方、相模湖畔の碧潭亭ホテルに入った二人連れのうち、男性客は、湖岸で絞殺死体となって発見された。男は、名刺から、業界紙「交通文化情報」の編集発行人・土肥武夫と、すぐ判明した。女の行方は不明であった。被害者の女性関係を中心に、事件の捜査が進められたが、痴情説・怨恨説とも真相は不明であるが、不明となっている女性の単独犯行とは考えにくいというのが、大方の意見であった。殺害の動機も含めて、真相を把握できない捜査本部は、土肥の交遊関係を中心に約二〇名の調査対象者をリストアップした。

そのリストを眺めていた三原警部補は、

ふと、その中の人物に、「博多出張中」とある事項が眼に止まった。

名前は、「極光交通株式会社専務 峰岡周一」とある。

この人は、二月六日の午後三時羽田発の日航機で福岡に行つたと説明がついている。

『点と線』と『時間の習俗』の間

峰岡周一という人物は、この小説冒頭の和布刈神事の描写の後、朝八時頃、小倉駅近くの大吉旅館に現れた男である。結局、この峰岡周一が、相模湖畔での殺人事件の実行者ということであるが、三原警部補の犯人・峰岡への飽くなき追求が、このように「ふと・眼に止まった」という形で展開していくのは、疑問のないことであろうか。

この「ふと・眼に止まった」から始まった峰岡への気持は、その後「どうも気にかかった」「納得できるまで確かめてみたかった」「諦めるのは早い」「納得がゆくまで・切れない」「どこか引かかる」などと、三原の単なる気持のひっかかりのままの状態で、捜査が進められる。それは、自分の峰岡へのこだわりが、相手に「かえって気の毒」に思うほどなのであるが、「完全なアリバイに、かえって気持がひっかかる」という形で、「犯人」への確証がかえって強められる。西鉄の定期券売り場辺りにいたことが峰岡の口へのぼらなかつただけで、「故意に省略したように」に思われ、それが、ただちに「峰岡周一は都府楼址に行ったのではない」と確信される。当初、土肥周辺の調査で上がった二〇名のうちで、「アリバイが証明された者が三分の二で、あと三分の一は当人の供述以外には確証が取れなかった」と言いながら、アリバイが完全に近い峰岡だけが、三原警部補の眼に「ふと、止まって」、その後は、峰岡と三原の、アリバイとアリバイ崩し、小説の内容はそれがすべてと言ってよい。

調べれば調べるほどに疑いようのないアリバイだが、一方では、三原の「粘りづよい性格」「疑念に執着」する性格、一方では、峰岡の、「三原の訪問を「待っていたよう」な態度、「ぬけめのない」性格、「落ちつきはらった」笑顔、「練りに練った計画に沿って、きわめて細心な注意を払う」性格、この両様の個性を組み合わせることによって、「いちばん無色」であった峰岡の殺人が立証されていくという、『時間の習俗』とは、そういう推理小説である。

現実の警察捜査のあり方が、こんなに、カン以前のカンに頼ることはあり得ないだろうか、犯人のアリバイ作りが、これほどに精緻にアリバイ崩しの挑戦を想定してなされているはずがないとか、そのような発言はしないでいきたい。

が、それにしても、終始、アリバイをめぐる三原と峰岡の応酬として語られる小説の、語られる価値とは、どういうものであるうか。三原警部補の飽くなき執念が、ついに綿密に構築した峰岡のアリバイ工作の全体を突き止める、それが推理小説の価値なのであると言われれば、私は、次の言葉を失う。私は、清張文学の全体を、それなりの純度を保持した文学であつて欲しいという願望を持っている。その立場から、述べさせて欲しい。

相模湖畔での殺人事件が起きた時、土肥と一緒にホテルに入った“女”の行方が、皆目つかめなかった。後に、それは、ゲイの須貝新太郎の扮装した姿であつたという説明が、なされる。これは、机上の論理に近いのではあるまいか。この“女”の正体は、この男女客を、新宿駅西口から相模湖まで乗せたタクシー運転手をはじめ、最後まで、三原が最後に気付くまで、相模湖畔で殺された土肥にさえ、ゲイであることが見破られることがなかった。この小説の事件の解明を困難にさせた原因の最大のものであり、そのことを構想のポイントともしているのは、その非現実感を言うのは、気が引けるのであるが、やはりリアリティを感じにくい。特に、このような男女客に格別関心を持って注視していたホテルの女中たちの目にも、まったく疑念を感じられることなくといった設定は、ほとんど不能ではなからうか。女性関係にことさら熱心であつた土肥が、なぜ、わざわざゲイを伴つて相模湖畔に来るのか、それらの説明も一切無い。アベックで湖岸に出さずれば、予定の殺人が一〇〇パーセント完全に実行される、と言うか、それらの説明などは全く必要でない、そういった推理小説のあり方に、疑問を抱く。

相模湖畔での殺人の片棒をかついだゲイの須貝は、その翌日、今度は、はるか九州の水城で、これまた絞殺死体となつて埋められた。冬の夜に、辺鄙な竹と雑木ばかりの山林に連れられて入る須貝が、峰岡に対して、なんの警戒心も持たなかつたということはあり得ないだろう。前夜、同じような暗さの中で、土肥を絞殺した峰岡である。同じような状況で、「今度は、自分が」と疑念を抱かない方がおかしい。それらについても、小説はなにも語る事が無い。一方が、ゲイと

は言え年齢的にも若い須貝が、峰岡の意図を察知した段階で、むしろ逆に反撃する可能性もある。これらの上に、この小説は、なんらの説明も加えない。

西鉄の定期券窓口に立っていたという峰岡の行動に関して、それが、現像したカラーフィルムを受け取る時の身分証明のための定期券購入であったという、後の説明。申し込み書に記入さえすれば誰でも購入できる普通定期券が、身分証明になるかという問題もあるし、身分証明が無ければ受け取れないかという疑問もあるし、さらに、この写真をめぐってのトリックを隠すために、カメラマンの梶原武雄を秘密のうちに東京に呼んで、ひそかに、その殺人までも計画するという峰岡の行動。

この『時間の習俗』という小説は、相模湖畔での殺人事件の犯人が、いかに綿密に和布刈神事を利用したアリバイ工作を計画し、それが、いかに懸命な粘り強さで見破られていったかについて、精細に語っていくけれど、それ以外の小説の諸要素に関しては、不注意あるいは無関心である。犯人の峰岡も、相模湖畔の殺人事件についてのアリバイ工作は、微に入り細に穿つ配慮をするが、その他の行動や計画に関しては、ほとんど配慮することが無い。要するに、この小説は、相模湖畔の殺人とそのアリバイ、それがすべてだということである。

七

本稿を、『点と線』と『時間の習俗』の間」と題したが、両作品の間に、本質的な意味での差異は無いと、私は考えている。前者が、香椎海岸での殺人事件、後者が、相模湖畔での殺人事件で、犯人とされる人物のアリバイが追求され、解明されていくという小説という意味での、本質的な差は無い。

さらに、警視庁警部補三原紀一が、最も犯人に遠いと思われる人物を犯人と直感し、確信して追求していくという、捜

查の常道とは思えない不自然さ。また、前者では安田辰郎が、後者では峰岡周一が、警視庁の三原警部補の訪問を受けた時、即座に、乗車の場所・時間などを時刻表通りに、分単位で正確に答えたりする用意周到さの不自然。あるいは前節で述べたような、綿密なアリバイ工作とその解明の部分以外での、不釣り合いな疎漏。或いはまた、中心の三原警部補か鳥飼刑事くらいにしか及ばない、登場人物描写の少なさ¹¹⁾。殺人現場での不慮の支障をまったく想定せず、その現場に着くことですべてが完全に成就するという発想の非現実性。両書に共通して、指摘される問題ははなはだ多い¹²⁾。

にもかかわらず、『点と線』と『時間の習俗』の間には、差があると感ずる部分がある。それは、社会性という問題であろう。『点と線』の場合、香椎海岸で殺害される官僚佐山憲一の内面はなにもろくに描かれるものが無いにもかかわらず、枢要の位置にたまたま所在したために、不運な人生の終末を余儀なくされる不遇と不条理が、作者が語らないでも、伝わってくる部分がある。しかも、それを情死という形で、波及を避けようとする権力組織の、いかにもあり得る狡猾さ。清張文学が伝えてきた不条理の感情が、『点と線』には、籠められている。しかも、ただ情死という形を整えるだけのために、愛する安田から不条理な死を押しつけられる「お時」の哀れさ。作者は、それらについては特に語らない。語らないけれども、日常を懸命に生きている小市民階層といった、清張文学の平均的読者には、身につまされてあわれと感じる実感であろう。それに対して、『時間の習俗』は、冒頭の和布刈神事から相模湖畔、さらに終わりの潮来のあやめ祭り、深い情趣を散りばめた描写にもかかわらず、その殺人事件の切実さに、共感されるところがほとんど無い。権力にむらがる醜悪な部分の争いが、たまたま事件として表面化したことが語られるだけで、読者の身近で切実な感覚とは無縁、ひたすら、アリバイ工作の解明が、数学の問題でも解くように、進められるに過ぎない。

「清張以前」の推理小説は―古くは探偵小説といったが、それらは、誰が犯人なのかを追求するのを第一義とする小説であった。しかし松本氏は、それよりも、なぜ犯罪がおこなわれねばならなかったのか、その動機に重点を置いた。

(小松伸六・松本清張全集第3巻「解説」、文芸春秋、一九七一年五月)

という解説がある。「なぜ犯罪がおこなわれねばならなかったのか」という部分での、清張文学の読者の共感の有無、それが、『点と線』と『時間の習俗』との差異であろう。⁽¹⁸⁾これは、重要なことである。文学が不朽の生命を持つかどうかは、それが共感を持って読まれ続けるかどうかにある。『点と線』にも、述べて来たように、瑕瑾と感じる部分が少なくなかったと私は思っているが、それを超えて共感を催す社会性が、この作品にはあった。これが、小稿の結論とするところである。

注

(1) このトリック誕生の経緯について、当時、「旅」の編集者・岡田喜秋氏が具体的に記述している。それによると、昼間は「見直し」がきくが、夕方はどうか分からず、当時は「時刻表」に「入線」時刻は出ていなかったため、アナウンサーで訊ねたがすぐは分からず、調査を依頼して翌日に訪ね、漸く四分間の空白の時間が分かったそうである。(岡田喜秋「松本清張の旅心」、『松本清張研究』vol.3・1997.8)。従って、このトリックが、鎌倉で療養中の安田の妻で、「時刻表」が愛読書である亮子によって、殺人計画の中に組み込まれたという設定は、作品の魅力的な構想の一つだが、現実にはあり得ない内容である。

(2) この辺のことについて、平野謙氏が「具体的な説明がない」と批判したそうである(安岡隆次『清張ミステリーの本質』、光文社・1984)。平野氏は、松本清張全集1「解説」(文芸春秋、1971)でも同様のことを述べている。

(3) 「この四分間の目撃はじつに不確実性の高い計画である」(山前譲「九州を舞台にした本格推理」、『松本清張研究』vol.5・1998.5)。
(4) 安岡隆次氏は、四分間のトリックについての平野謙氏とのやり取りの中で、「合理的に納得できるんだから、(中略)そんな説明を入れると小説ではなくなる」と発言されているが、私は、合理的には納得できないと思う。ただ、合理性とか納得の感覚は、推理小説愛好家と文学研究者の互いに理解しにくい差異であろうかとも思う。

(5) たとえば、清張は、「紐」(『黒い画集』)という短編小説において、映画館の入場券の半券について、「普通は、あんなものは

破り捨てますが、それをわざわざ後日まで保存しておくのが、おかしいじゃありませんか」と言わせている。それと、同断の内容ではあるまいか。

(6) 森村誠一氏は、「『点と線』は、ベスト10を取ると必ずトップの方へきますけれど、あれは軽すぎますよ。清張にしては」「刑事が最後まで空路に気がつかなかったことも：」などと発言されている(座談会「松本清張の時代に生きて」、「松本清張研究」第四号、2003.3)。それ以前に、安間氏は、「警部補の三原が、すぐには飛行機を思いつかなかったとしても、不思議でもなんでもない時代だったのであって、三原のそれは平均的な庶民の感覚だったのです。これこそリアリティというものでしょう」(注(2)前掲書)と言われているが、必死に緻密なアリバイ工作を練った安田に対する評言ではない。リアリティの言葉は誤用されていると思う。

(7) この辺のことについて、平野氏は、「作者はいたるところで同じ次元の感想をばらまいているだけで、そういう警部補の坎を深めるような事実も論理も、ほとんど描いてはみせてくれない」(注(2)「解説」と述べられている。全面的に賛成である。

(8) 「完璧なアリバイを持っているというだけで、探偵がヤツキになってそのアリバイを崩そうとするような作品」(平野謙・注(2)「解説」)。安間氏でさえもが、「アリバイ破りの常套的やり方に、根底でつい拗つてしまつてはいないか」(注(2)書)と説明されている。

(9) 「私のいわゆる『アリバイ破り』のための『アリバイ破り』という傾斜が多少ともみられる」(平野謙・注(2)「解説」)

(10) 『点と線』について、清張自身が、「この小説では、いわゆる謎解きの方にウエイトを置いて、動機の部分は狭くした。それが『本格』の常道かどうかは知らないが、私の今までの主張を自ら裏切つたようで少々後味が悪い」(『点と線』あとがき、光文社・昭33)と記している。

(11) 清張は、「従来の探偵小説乃至推理小説がなぜ文学に縁遠いか。要するにそれらは人間が描かれていないからである。近代文学の要素である人間心理がまるで無視されている。あるものは類型的な人間の行動だけであり、心理とも呼べないような観念的な、人形的な性格だけである」(文芸推理小説選集1『森鷗外・松本清張集』解説、文芸評論社・昭33)と述べており、まこと

に同感であるけれども、小説『点と線』において、それが十分に表現されているかどうか。私は、やや否定的である。

(12) 清張自身、「点と線」の「眼の壁」は、長編推理ものの「習作」で、自分としては、次を見てくれといたいたいところなんだ（インタビュービュー「愛欲のスリラーある松本清張論1」、「週刊東京」・昭34・5）と語ったそうである（未見）。

(13) 「点と線」の濃密なリアリティにくらべれば、「時間の習俗」のそれはかなり稀薄だといわねばなるまい（平野謙・注（2）「解説」）。「ここでは、「点と線」以上に動機が考慮されていない。それはまったく無視されていると言っていいだろう」（山前

譲・注（3）論文）

（本学教授）